プレイエルとショパンの物語
VOL.5 ヴィルトゥオーソの詩

早川奈穂子

フォルテピアノリサイタル

11/22 2025 Sat

open 16:00　start 16:30

兵庫県立芸術文化センター
神戸女学院小ホール

CHOPIN

練習曲 op.10
練習曲 op.25

そのペダルに、ショパンの秘密がありました。

「革命」は、
ここから始まる。

7/7 先行予約　**全席自由**　8/8 発売開始

一般 **¥3,000**　学生 **¥2000**

◇Harmonie des Fleurs
◇PassMarket

未就学児のご入場はご遠慮願います。

お問い合わせ
ミュージック・アート・ステーション
06-6836-7067

主催：Harmonie des Fleurs
助成：公益財団法人神戸文化支援基金
後援：ポーランド広報文化センター、(公財)神戸市民文化振興財団
一般社団法人全日本ピアノ指導者協会(ピティナ)

ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO

About the fortepiano

プレイエルを聴く時、音の強弱、色合い、質感が常に変化し
蝋燭の炎のような繊細さと魅力があり、異空間へと誘われる・・・
－Producer R.P.Dias

このコンサートでは1845年製のプレイエル(No.11457)が使用される。プレイエルはショパンが最も愛したフランスのピアノメーカーで、晩年はこの楽器と同型のプレイエルで作曲していた記録が残っている。古楽器の選定や修復には、モダンピアノ仕様に改変しない様に多くの古楽器を知り修復経験のある修復師に依頼する必要がある。その為英国王立音楽院博物館の名誉理事長Christopher Nobbs氏と共に選定に周り、最終的にDavid Winston氏のプレイエルが選ばれた。Winston氏はCobbe Collectionが所有するショパンが晩年所有していたプレイエルや、ベートーヴェンが使用していたBroadwood、またイギリス王室所有のErardの修復も任されたイギリスで信頼の置かれている修復家。また2019年には現在英国王立音楽院博物館やスウェーデン王室、ヨーロッパの著名古楽演奏家達の歴史的ピアノコレクションの調整も担当しているMichael Parfett氏が来日、このプレイエルの調整を調律師阿部秀明氏と共に行った。早川は日常的にプレイエルを弾く環境にあり、譜読みの段階からプレイエルに触れることにより、これまでの概念を覆す飽和しすぎない響きや演奏解釈を見出す。その演奏は、プレイエルという楽器の「語る」特質、そしてチェンバロの時代から続く発音方法の心的印象により、ショパンの新たな声が聴こえて来ると評判を呼ぶ。早川は、ショパンのペダル記号に完全に従う演奏を2021年のリサイタルより試みている。これは現代のピアノやフォルテピアノの演奏ではほとんど行われないことであり、非常に異なるニュアンスの演奏効果をもたらす。特に、長いパッセージや全曲でペダルが全く指示されていない演奏においてその結果は大きく異なり、物議を醸すことになる。カミーユ・サン＝サーンスは、『ショパンの作品でペダルが頻繁に指示されるのは、指示されていない時にペダルが使われることを彼が望まなかったからだ』と発言している。早川は2017年より取り組んでいる歴史的研究と、プレイエルを所有し譜読みの時からフォルテピアノ上で音を検証して来ている経験から、これは真実だと確信するに至った。この度のリサイタルでは、非常に有名なショパンの練習曲op.10とop.25の全24曲を演奏予定。これらはショパンのスタイルとテクニックのヴィルトゥオーソ的主要作品であり、ショパンがペダルの使用と不使用を対比させて、どのような表現的効果をもたらしたかを聴衆に紹介することができる。有名な「革命のエチュード」もショパンのペダル指示は終始ノーペダルであり、これまでの演奏概念とは非常に異なる音楽感、プレイエルならではな倍音の多い低音から、暗く強い、恐ろしいほどの蠢きを生み出す。作曲家が使用していた現代とは大きく異なる楽器、それによる音楽再現に出逢う事により衝撃とも言える価値観転換の起こる瞬間は、私達の歩んできた人生・文明についても何か深い思慮へと導いてくれる芸術的体験となり、肥大化・機械化・均一化する現代社会の中の一隅の薫り、灯火となると思われる。どうぞご堪能下さい。 (音楽監督 R.P.Dias)

私は気分のすぐれない時はエラールのピアノを弾きます
このピアノは完成された音を出すからです
しかし、身体の調子が良くて自分だけの音を出してみたい時は
プレイエルのピアノが必要なのです
－F.F. Chopin

Naoko's YouTube

フォルテピアノ *Naoko Hayakawa* 早川奈穂子

大阪音楽大学卒業(橋野豊子氏に師事)。学内では演奏家のための特別選抜コースにて野島稔氏に師事し在学中よりコンクールに多数入賞。学外ではBarry Snyder氏の元で数年に渡りロシア奏法を学ぶ。クールシュヴェル国際音楽アカデミー(フランス) へ渡り研鑽、現地でのコンサートに出演。その後モスクワ音楽院セミナーにてDina Joffe女史に度々彼女の元への留学を薦められ数年間レッスンを受ける。岸本雅美女史の元ではバロック・古典作品の演奏法を特に学び、演奏と理論の礎に多大な薫陶を受ける。2001年ノーヴィ国際音楽コンクール第１位を受賞。2006年ポーランド国立ショパン大学にてテレサ・マナステルスカ女史の元研修しポーランドにおけるショパンの伝統的な演奏法を学ぶ。その間ウィーンやドイツ・イタリアで学んだ様々な声楽家・管弦奏者の指導下でのレッスンピアニストを長年務め、声楽的・他楽器の見地からの演奏法と共にオペラや歌曲・室内楽作品に多く触れる。現在は全国各地でリサイタルや多数のコンサートに出演。京都市交響楽団メンバーとも室内楽共演を重ねる他、協奏曲ソリストとしても各オーケストラより度々招聘され黒岩英臣氏等と共演する。共演中の創作演奏をきっかけに作編曲の依頼も増え楽譜出版に携わり、編曲作品はCD収録やコンサートでよく使用されておりラジオでも取り上げられる。楽器店での楽曲レクチャーやコンサート、新響楽器やヤマハのコンクール審査員を務める他、東北や熊本での復興支援コンサートにも長年関わり、後進指導にも携わる。2017年春よりピリオド楽器に偶然出逢い、試弾を聴いていた英国人楽器オーナーにより録音プロジェクトにスカウトされ、日常的にそれらの楽器を練習できる機会に恵まれた。現在は伴侶となり1845年製のプレイエルでコンサートが共に進められ、エラール1875年・ブロードウッド1803年・ロングマン&ブロデリップ1789年他、チェンバロやフォルテピアノに日常的に触れながら歴史的演奏の研究・紹介に取り組んでいる。2019年よりイギリスの多くの歴史的ピアノコレクションを訪れ、約90台のオリジナルのピリオド楽器(1600～1800年代)を試弾。その際古楽界で世界的に有名なフィンチコックス博物館オーナーにより招聘され、2023年イングランドでの博物館主催のコンサートシリーズに出演、グラーフやエラールでのリサイタルとレクチャーを行い好評を得、2025年も招聘される。フォルテピアノやチェンバロのピリオド奏法をフランスやイギリスにてSally Sargent氏、Linda Nicholson氏に師事。http://naokohayakawa.com

チケットお申し込み (◆先行発売 7/7より ◇一般発売 8/8より)

◆ Harmonie des Fleursチケットオフィス **https://fleurs.official.ec/**
◇ PassMarket **https://passmarket.yahoo.co.jp/**
◇ ミュージック・アート・ステーション **06-6836-7067**